教職キャリアセンター紀要　vol. 1　pp. 35 ～ 42, March, 2016

国語科におけるアクティブ・ラーニングの開発と課題
―「質の高い深い学び」につなげる活用型テキスト―

佐藤 洋一*　森 和久**　有田 弘樹***

*教職実践講座
**名古屋市立鶴舞小学校
***安城市立安城西中学校

Development and Problems of Active Learning in Department of Japanese
—Text of "High Quality and Deep Learning" which Pupils Can Apply to Their Learning—

Yoichi SATO*,　Kazuhisa MORI**　and　Hiroki ARITA***

*Department of Practitioners in Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan
**Thurumai Primary School, Nagoya 466-0064, Japan
***Anjo-nishi Junior High School, Anjo 446-0052, Japan

要　　約

これから求められる「新しい教育の在り方（21世紀型教育）」を創造・開発、実践する鍵として、アクティブ・ラーニングとカリキュラム・マネジメントが提言されている。アクティブ・ラーニングにおける課題発見・問題解決能力の育成、主体的能動的・協働的な学びによる深化とメタ認知化方略の在り方については様々な提案がある。一方、各教科の本質・原理の重視とそれを超えた教科横断性・汎用性との関係、パフォーマンス課題・評価方法の開発等、具体化をめぐっては多様な諸課題・論点も出されている。特に、各教科の本質に根ざした見方・考え方等を活かすアクティブ・ラーニングとカリキュラム・マネジメントは、これまでの授業の何をどう変えるのか？　国語科におけるアクティブな（ディープな）学びとは、何がどうなればいいのか？　「言語活動の充実」との関連、評価・メタ認知化していくための本質的で妥当な戦略とは？　習得の学びを踏まえた活用・探究段階としての、いわば人間的な学び・質的な価値ある学びをどう構築していくことが可能なのか？

アクティブ・ラーニングは学び型の一つの手法であり、その目的は学習者の、学級集団（組織）における「学びの質」、「質的な価値ある深まり」（ディープ・ラーニング）の獲得、そして答えのない時代に授業を通じて「習得・活用」した学びの方略を自己課題や生活経験・生き方と結び付け、「一般化・汎用化（探究）」できるようなメタ認知能力の育成にある。本稿は、国語科におけるアクティブ（ディープ）・ラーニングの開発と課題について実践事例を例に、特に「質の高い深い学び」につなげる活用型テキスト論の観点から論ずるものである。

Keywords：国語科アクティブ・ラーニング、活用型テキスト形式、パフォーマンス評価、質の高い深い学び

一　次期学習指導要領（論点整理）と新たな学び（21世紀型教育）を創るために

次期学習指導要領の基準となる資質・能力観、学力・評価観等が「論点整理」「補足資料」（答申素案）等によって公表された。改訂のポイントとして、1「何ができるようになるか（新しい時代に必要となる資質・能力の育成）」、2「何を学ぶか（育成すべき資質・能力を踏まえた教科・科目等の新設や目標・内容の見直し）」、3「どのように学ぶか（アクティブ・ラーニングの視点からの不断の授業改善）」の三つの視点が示されている（注1）。

これらは、従来の「生きる力」の理念を具体化した「将来の変化を予測することが困難な社会の中で、自

立した人格をもつ人間として、他者と協働しながら、新しい価値観を創造する力」（資質・能力、21世紀型能力）育成があり、これは「第二期教育振興基本計画」（2014年6月閣議決定）の文言につながるものである（傍線は稿者、以下同じ。詳細は「二」で述べる）。

新しい学び（21世紀型教育）を創造・開発するためには、各教科等における授業研究・教材研究や指導過程・カリキュラム開発、評価論、学習理論等、現時点での情報を踏まえた考察や提案を行っていく必要がある。

本稿は、新しい学びとしての21世紀型教育と国語科学習の在り方について論ずるものである。特に、「言語力」向上と国語科学習を核にした汎用的な学習システム（アクティブ・ラーニング）の開発、活用型能力・学力（「思考力・判断力・表現力等」）育成を重視した教育内容・方法の改善、パフォーマンス課題（評価）とルーブリック作成についての課題・論点等を提案していく。

二　求められる21世紀型資質・能力、教育

1、次期学習指導要領構造化に明記された「三つの柱」

「検討会－論点整理－」（文部科学省）の提言では、次期学習指導要領・教育課程の構造化を、1「児童生徒に育成すべき資質・能力」を明確化した上で、2各教科等でどのような教育目標・内容を扱うべきか、3資質・能力育成の状況を適切に把握し指導の改善を図るための学習評価はどうあるべきか等の視点から見直すことの重要性が語られている（注1）。

こうした提言の背後には、世界的潮流としてのコンピテンシー概念や海外のカリキュラム動向を踏まえていることが大きな特徴である（OECDの「キーコンピテンシー」、米国の「21世紀型スキル」等）。21世紀型の学びや授業の在り方等を考えていくとき、海外各国の資質・能力論の動向・分析や「21世紀型能力（試案）」（国立教育政策研究所）を踏まえた資質・能力観の検討・開発、これらを踏まえた各教科等の教育目標・内容、方法、評価の構造化といった視点が必要になる（注2）。

2、育成すべき「資質・能力観」と「学力の三要素」

「教育課程企画特別部会－論点整理－」では、これからの教育で育成すべき資質・能力観と「学力の三要素」（学校教育法第30条）の対応が明確に位置付けられた（注1、**資料1**）。1「何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能：習得・自立）」、2「知っていること・できることをどう使うか（教科等の本質に根ざした見方や考え方等、思考力・判断力・表現力等：活用・協働）」、3「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（情意、態度等に関わるもの、主体性・多様性・協働性、学びに向かう力、人間性等：意欲・習慣、協働・創造）」、という「三つの柱」に整理されている（波線部は「第二期教育振興基本計画」の文言との関連性を考慮した稿者による追記である）。

資料1　「学習指導要領等の構造化のイメージ」（注1）

また、これら「三つの柱」をつなぐ主体的・能動的な学びの方法として「アクティブ・ラーニング」（「どのように学ぶか」）が位置付けられている。

つまり「三つの柱」とは、「資質・能力の三要素」に「学力の三要素」（習得、活用、主体的な学習態度・人間的な学びに向かう力）を対応させ、各教科等で身に付ける力と教科横断的に身に付ける汎用的な力とを相互に関連付けながら構造化・往還し育成するものとしている（「アクティブ・ラーニング」と国語科授業についての課題・考察は「六・七」を参照）。

三　新しい学びの創造、その課題・論点とは？

1、各教科の本質・特質に根ざした学びと汎用性（横断性）、各教科の特性への視点―国語科を例にして―

論点整理・答申素案で「各教科等を学ぶ本質的な意義」と「教育課程の要素全体」、各教科等を貫く「汎用性」の重要性を改めて明示したことには、教育課程の新たな構造化の視点を示した面でも大きな意義がある（どの教員にも求められる「カリキュラム・マネジネント」の新たな意味付け）。また、「言語力に関する能力の向上」⇒古典・伝統文化理解の重視、異文化理解、多種多様な人々との協働、これらの学びから課題解決能力育成へという指摘にも共感したところである。

しかし、各教科の特質や構造的な特徴・役割等についての言及がやや平板なため、教科の特性と深い学びを重視しつつも、「教科横断的・汎用性」の観点の可視化には、混乱が起きるのではないか。

特に国語科学習はその特性から、少なくとも三つのレベルの重層的な役割（機能）・構造をもつと考えることができる。一つは、言語力・コミュニケーション能力育成の基盤・基幹教科の役割（知識基盤社会・グローバル社会における思考力・判断力や多様な表現力等のすべての基盤）、二つは「考え・解釈の形成」から「思考力・判断力・表現力等」（活用力）・「主体的な探究・課題解決能力」に関わる論述・プレゼンテーション等の資質・能力育成としての教科（情報の正確な理

解や解釈、受容から分析・批判的考察、判断から評価への活用・探究能力)、そして三つ目は、古典や諺・格言・故事成語等の学習の意義理解に限らず（現代につながる日本語の構造と位置、特質の理解、言語の歴史的意味の理解と活用力)、学校教育全体、各教科・領域・活動等における伝統文化理解教育等の中核の教科になると捉えることができる（アイデンティティーの形成と異文化理解の基盤)。こうした特性を踏まえた教科横断性・汎用性の指摘も必要ではないか（注3・7)。

2、「思考力・判断力・表現力等（活用)」と「応用・発展」の違いとは、何か？―テキスト形式論から―

「思考力・判断力・表現力等」（活用する力）を、「知っていること・できることをどう使うか」「教科等の本質に根ざした見方や考え方等」と意味付けられているが、「判断力（批評的な能力、考察・分析等)・表現力（論理的・文学的・複合型？…、鑑賞・批評・論究？)」の特質や意味、これらの在り方についての言及が不明確である。実生活における諸課題を、主体的に判断し課題を発見・解決、表現していくためには、学び方のモデルとなるような「基本のテキスト形式」と「多様な（活用・探究的な）テキスト形式」の明示が必要なのではないだろうか（注4)。

また、「活用すること」とは、要するに何がどうなればいいのかについても、問題解決学習の過程における判断力の諸層については指摘されているが、各教科・教材・単元レベルになったときには依然として曖昧なままである。誤解を恐れずに述べれば「活用＝表層的な応用・発展、展開」と混同されている実態があるように見受けられる。しかし、これでは活用の指導・支援と評価ができない、また活用の先にある（相互関係にある）より主体的で批評的・創造的探究（統合）学習の構築や評価、さらに「質の高い深い学び（より高度な学び)」の指導・支援と評価が十分にできないのではないかという危機感をもっている。

教育学的な、認知心理学的な思考過程や学びの枠組みは新たな視野を与えるが、それだけでは教科の本質に根ざした深い学び、それらを見取るためのルーブリック（評価規準・基準)、パフォーマンス課題の作成と評価はできない。今後の「答申」段階での整理によって、より明確化されていくことを期待したい。

四　国語科アクティブ・ラーニング開発（実践）

1、パフォーマンス課題・評価と「習得・活用」の位置

「深い人間的な学び」を評価するためには、論述・レポート作成、発表・プレゼンテーション、グループでの討議と提案等、多面的な評価の工夫が不可欠である。このようなパフォーマンス課題・評価を有効にするための学びの指導・支援として、改めて「習得・活用」の位置付けが重要である（資料2)。

2、「習得・活用・探究」の学習内容・段階の明確化

「習得・活用は整然とは分けられない」、「習得・活用・探究は学習段階ではない」等の指摘もあるが、改めて「習得・活用・探究」の学習内容・段階を明確化することには二つの意味がある。一つは、基礎・基本（習得）から発展（探究）に向けた学びの過程における大きな飛躍を埋められること。二つには、「各教科等の本質＝教科固有の学び、基礎・基本の学力とは何

資料2　国語科「習得・活用・探究」の学習過程モデル（「注3. 付記」参照）

学習段階とその位置		身に付けさせる言語力、その「習得」から「活用」「探究」へ
習得型学力↑↓活用型学力	**導入・基礎学習　【習得型学習1】** …全教科の基礎となる言語力を育てる学習段階	1. 音読（内容理解の基礎、場面・段落の単位で)、2. 話す態度や姿勢・話型、3. メモ・ノート指導、4. 聞く態度や基礎（キーワード、具体例の数、引用・要約等)、5. 漢字や概念・知識の理解と活用の基礎（語彙力、諺、故事成語等）
	基本学習　【習得型学習2】 …国語科固有（教科の本質）の基本となる言語力を育てる学習段階	1. 説明文（論理的文章）の読み方（書き方）の基本モデル学習、2. 文学的文章（民話・民謡、物語・小説、ファンタジー、詩歌等）の読み方（書き方）の基本モデル学習、3. 伝記（記録)・ノンフィクション、随筆、鑑賞・批評・評論等の読み方（書き方）の基本モデル学習、4. 話す聞く（伝え合い）の基本モデル学習
	発展的学習　【活用型学習1】 …「考え・解釈」を論理的にまとめるための言語力を育てる学習段階	1.「自分の考え・解釈」をもつ学習…教材理解（受信）から説明力（発信）レベル、2.「自分の考え・解釈」を論理的にまとめる学習…自分の問題意識、立場・関心等を活かし、「習得」したことの再構成レベル（一貫した主張・構成の型の理解、キーワードの理解、引用・要約、タイトルの付け方、資料の意図的・効果的な活用等）
	発信・交流学習　【活用型学習2】 …「考え・解釈」を論理的に伝え深め合うための言語力を育てる学習段階	1. 説明（発信）技術の基本モデル学習…論理的構成の型、引用・要約、非言語情報の活用等、2.「質の高い深い学び」のための基本モデル学習（習得）から活用・探究へ…情報の正確な理解から批評的に読み解き発信する、要約・引用の活用、メモ、質疑応答、立場の理解からよりよいものに改善・提案、新しい課題の発見等
評価・一般化	**振り返り　【学びの自覚、メタ認知化】** …自己評価、他教科等や生活に活かす「学びの一般化・汎用性」を獲得するための学習段階	1. 学びの到達度（習得）レベル、2. 課題解決能力につながる「思考力・判断力・表現力等」レベル、3. 他者・情報から学ぶ「協働的な学び」（同僚性、協働性）レベル、4. 他教科等や経験とのつながりを発見し活かす（学びの一般化・汎用性）レベル、5. 課題発見と質の高い疑問・改善提案の工夫レベル、6. 自己の生き方・価値観の形成、立場・専門性の見直し・再構築レベル等
探究型学力	**探究型学習** **…質な集団・組織の中で、「自分の考え・解釈」を活かし、互いに学び合う学力を育てる学習段階**	1. 国語科における総合発展学習、2. 各教科・領域・体験・読書力等を活かした発展学習、3. 学習者の関心・意欲、問題意識等を活かした主体的課題発見・解決学習、総合的な学習の時間等

か」、「活用とは…要するに習得したことがどうなればいいのか、その先は何か…」等の学びの到達度を、子どもにも教師にもより鮮明にさせることにつながる。

特に、国語科は言語力・コミュニケーション能力育成、各教科等における「思考力・判断力・表現力等」・「主体的な探究・課題解決能力」育成といった資質・能力育成としての基盤・基幹教科としての役割をもつ。そのため、国語科「習得・活用・探究」の学習過程モデルを提示することは、国語科「習得・活用型能力・学力」や系統的・段階的な指導・支援と評価観の明確化だけでなく、各教科等の「質の高い深い学び」の過程、教科横断的・汎用的な視点の獲得、全教科における国語科の位置等もより鮮明にさせることができると考えている。

五　テキスト形式論とパフォーマンス評価（課題）

1、「学力の三要素」と学習評価（観点）の対応・整理

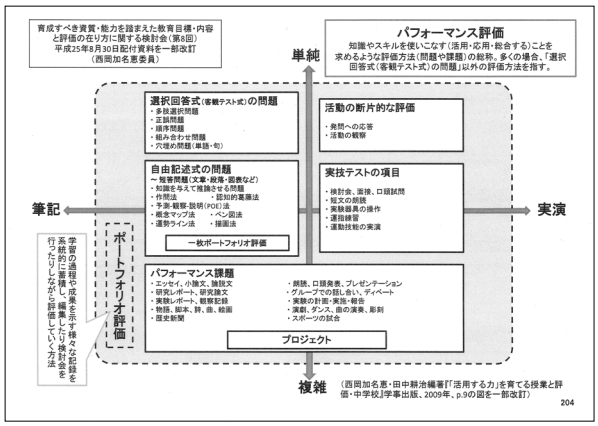
「論点整理」では、一人一人の子ども達によりきめ細やかな学習指導の充実と学習内容の確実な定着を目指すべく、観点別学習状況の評価が整理される。具体的には、従来の「4観点」（「関心・意欲・態度」、「思考・判断・表現」、「技能」、「知識・理解」）から「3観点」（「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「主体的に学習に取り組む態度」）となり、「学力の三要素」（学校教育法第30条）との対応が示されたこととなる。

このことは、全員の子ども達に「基礎的・基本的な知識・技能」（習得）の確実な定着だけでなく、各教科の本質・特質に根ざした「思考力・判断力・表現力等」（活用力）の具体的な育成、それらを見取り高めるための指導・支援と評価を行っていくことの必要性を意味する。

2、アクティブ・ラーニングとパフォーマンス課題（評価）

アクティブ・ラーニングによる学習活動、育成すべき資質・能力（学力）をどう評価するかが大きな実践的課題となる。現在、子ども達の「質的な学びの価値、深まり」（ディープ・ラーニング）を把握するために、多様な評価方法の研究（「真正の評価」論からの提案）や取組が行われている。「真正の評価」とは、「現実生活」における課題や状況において子ども達のパフォーマンスを映し出し、かつ測定するような評価のことであり、「パフォーマンス評価」や「ポートフォリオ評価」といった評価方法がある（資料3、注5）。

資料3　パフォーマンス課題・評価の構図（注1）



「パフォーマンス評価」とは、知識やスキルを使いこなす（活用・応用・統合する）ことを求めるような評価方法のことであり、論説文やレポート、展示物といった完成作品（プロダクト）や、スピーチやプレゼンテーション、協同での問題解決、実験の実施といった実演（狭義のパフォーマンス）を評価する。各教科の本質・特質に根ざした「思考力・判断力・表現力等」（活用力）を見取り高める（「質の高い深い学び」の実現・保証の）ためには、「ルーブリック」（成功の度合いを示す尺度、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示す評価基準表）の作成が重要な鍵となる（注1）。

3、テキスト形式論とパフォーマンス課題・評価（実践）
―随筆の創作と評価を例に―（詳細は注記を参照）

(1) 随筆教材の実態と指導上の課題・混乱とは？

随筆は中学・高校教材としてしばしば取り上げられてきたジャンル（テキスト形式）の一つである。現行学習指導要領では、随筆を創作・評価する学力育成が新たに位置付けられたが、随筆教材のもの「自由な形式？」がかえって身に付けさせる学力観・指導観、評価観を曖昧にしてきたといえる。

(2)「活用型（複合型）テキスト」としての随筆教材

随筆とは、見慣れた日常や何気ない経験・社会の出来事から作者（筆者）独自の感性や認識、考察・判断等を自由な形式で語った「短い文章や断章」といった捉え方が一般的である。基本的には論理的な構造をもちつつ、一方で作者（筆者）らしい発見と認識・批評をエピソードの選択と場面構成、個性的な語りと描写、象徴的イメージ等といった文学的な独特の表現で語られる特質がある。つまり、随筆は文学的文章と論理的文章の二つのテキスト形式を合わせもつ「活用型（複合型）テキスト」といえる。随筆教材のテキスト形式を活かした学び方の指導は、現実や現象・人間関係等を個性的な感性と判断、論理性の中で捉えて発信する「言語力」とともに「批評的・創造的リテラシー」をも鍛え高めることができる。

(3) 実践概要―向田邦子「字のない葉書」（中二）―

単元全体を通して、「身近な人の（再）発見」をテーマに随筆を創作し発表・批評することを位置付けた（パフォーマンス課題）。向田邦子「字のない葉書」（中二・光村）をモデルとして単元を構想した（7時間完了。本実践は春日井市立松原中学校第2学年4クラス〈2013年10月〉、安城市立安城西中学校第2学年1クラス〈2015年9月〉に行ったものである）。

「習得」の段階では、①随筆のテキスト形式の理解、

②前提にある常識的な見方・考え方（昭和10年代の父親像、東京大空襲、学童疎開等）、③論理的な場面構成の型の応用・工夫、④（エピソード単位で）語りと描写・象徴的なイメージの方法・解釈を行った。「活用」の段階では、「習得」の学び（学び方のモデル）を活かした随筆の創作活動と発表・交流（批評）を行った。

結果的に、ほぼ全員の子ども達が随筆を創作し、互いの随筆を批評し合うことができた（**資料4-1・2**）。

3、子どもが創作した随筆の、どこをどう評価するか？

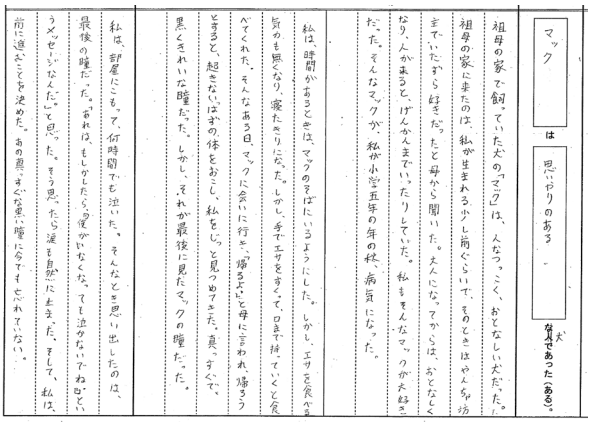
子ども達が創作した随筆は、以下6項目から見取り、指導・支援し深めていくことができる（子ども達の生き方・価値観、表現力の評価の観点＝パフォーマンス評価）。

(1) 随筆を学ぶことの楽しさ・追究意欲レベル
(2) 随筆の学び方（習得・活用）の理解レベル
(3) 語りと描写・象徴的なイメージの選択と考察
(4) 選択した人物と生き方・価値観・時代背景
(5) 自己の生き方・生活経験と結び付けた考察
(6) その子らしい表現力（着眼点・描写力、要約・キーワード化）―論理的に／個性的に解釈を語る―

これらをより具体化したものについて、6つの観点を6段階にレベル化したものをルーブリック（評価基準）として作成した（**資料5**）。ルーブリックを活用することで、例えば以下のように随筆A（女子、**資料4-1**）を授業（交流、学び合い）の中で活かすことができる。

随筆Aを書いた女子Aは、友だちとコミュニケーションをとることが苦手で、トラブルメーカーであった。しかし、①愛犬の「黒い瞳」に象徴されたタイトルの付け方、②愛犬の設定をシンプルに語れていること、③病気になった愛犬との別れの場面を、会話と行動描写を活かし象徴的に描けていること、④随筆特有の場面構成の型を理解し、工夫できていること、⑤最後に見た愛犬の瞳（「黒い瞳」）の分析と解釈、愛犬の思いを受け止め（「成長」の表現）前向きに生きていこうとする解釈の仕方、等に着目させることで、多くの子ども達が女子Aの（常識的で観念的な）見方や考え方を変容させていった（随筆Bは紙面の都合で省略）。

資料4-1　子どもの随筆A（女子、題名「黒い瞳」）


マック　は　思いやりのある　犬であった（ある）。

祖母の家で飼っていた犬の「マック」は、人なつっこく、おとなしい犬だった。祖母の家に来たのは、私がまだ、まだ、まだ、ま

六　考察―深い、人間的な学びの創造へ―

1、テキスト形式の解明から授業・カリキュラム開発

現行学習指導要領「国語科」では、報告・鑑賞・批評、物語、詩歌、随筆等を正確に読み解き判断し、自分の立場や課題意識から独自の感覚や感性、分析力（考察・解釈の視点）、論理性をもって書く学力を、すべての子ども達に系統的に指導・支援し、評価することが求められている。これらはまさに、論述・評価、分析･解釈等の判断力、創造的に･協働的に学び合い批評する力であり、本稿で論じているアクティブ（ディープ）・ラーニングの在り方に関わっている。

しかし、多様な「テキスト形式」、すなわち基本モデルとなるいわゆる「習得型テキスト」、学力テストＢ問題をはじめ、批評的・創造的な学びの力を鍛え自ら発信するために必要となる、いわゆる「活用・複合型テキスト」についての言及や研究、その重要性についての指摘は極めて不十分である。そのため、学校現場では子ども達に主体的課題解決のための活用型能力・資質（学力）や批評的・創造的リテラシーを指導し高める必要性は十分に認識していながらも、具体的な実践や授業論・評価研究になると新たに教材化された鑑賞・批評・評論や伝記・ノンフィクション（記録・ルポルタージュ、ニュース･報道写真）、随筆･詩歌創作等への授業開発と提案、指導過程論・教育課程（カリキュラム・マネジネント）での対応が追いついていない現状がある（注4）。

2、学習活動（言語活動）と評価観・方法開発

アクティブ・ラーニングによる学習活動、育成すべき資質・能力（学力）をどう評価するのかが大きな実践的課題となる。評価規準になる「知識・技能＝個別の知識や技能（何を知っているか、何ができるか）」は習得型の知識・技能のため量的・質的にもぶれることはなく、比較的ではあるが評価がしやすい。

しかし、アクティブ･ラーニングが主体的･協働的な学び型を超えて「質的な学びの価値、深まり」（ディープ・ラーニング）やメタ認知化の定着レベルを具体的に見取るためであるならば、評価規準の「思考力・判断力・表現力＝教科等の本質に根ざした見方や考え方等（知っていること･できることをどう使うか）」との関連での評価方法（ルーブリック）の本質性（教科の学びの本質に根ざしているか、学習者の学びにとって的確か等）、さらに学びの系統性からの妥当性等が課題となる。

3、評価規準「思考力・判断力・表現力等」の明確化

すなわち、アクティブ・ラーニングの学びの成否、質的な深い学び（ディープ・ラーニング）を決定づけていくのは、各教科等の本質・特質に根ざした「思考力･判断力･表現力等」（活用力）の具体的な育成、指導･支援と評価観（評価規準･レベル化の明確化、例：ルーブリックの妥当性・本質性、汎用性）にかかっている。

例えば、活発で全員参加…のような話し合いや討論だけで、このような高度な資質･能力（学力）を全員に身に付けさせることができるのか。もしできるとすれば、どのような討論や協議、質疑応答、振り返り（メタ認知化）をさせることが必要なのか。

つまり、パフォーマンス課題（・評価）の教師による提示の在り方と学びの過程としての「習得・活用段階の学習」が的確に行われたのか否か、その本質性…例えば、随筆（エッセイ）の「テキスト形式」の特質を活かした教材研究、「習得」から「活用」への学びの過程をどのように論述・報告、発表させるのか、それらの妥当性・汎用性も関わってくる（注5）。

4、テキスト形式論とアクティブ・ラーニング

これから求められる資質・能力（学力）では、多様なテキスト形式に対するいわゆる「熟考･評価」、つまり日常生活で出会う多様なジャンル・テキスト形式の文章や表現スタイル・論述に対して、的確な解釈・分析・評価できる判断力、さらには自己の生き方・価値観の形成、集団や組織のためによりよいものに修正・改善、提案できるような資質・能力（学力）が求められている。

論理の飛躍や意図的な誤魔化し・すり替え、悪意ある価値観等がまぎれ、あふれている現代をたくましく生きる力を育てる…という観点からみると、特に以下のような国語科「習得・活用型学習」が基盤になると思われる。

論理的にまとめ、わかりやすくかつ平明に構成し論述できる力（報告・レポート作成の「習得型学習」）、自分の問題意識や関心、観点から情報を選択･構成し、説得力のある表現に高めることができる学力（鑑賞・批評、評論等を書き評価できる、さらにプレゼンテーションできるような「活用型学習」）、多様なテキスト形式を活用できる力（昔話、古文、新聞･映像や画像･アニメーション、データ、CM等）、プレゼンテーション等との関係や評価をどう考えていくのか（注3）。

七　国語科･学ぶ楽しさと「質の高い深い学び」―アクティブ･ラーニングを活かす授業とは？―

アクティブ・ラーニングにおける課題発見・問題解決能力の育成、主体的能動的・協働的な学びによる深化とメタ認知化方略の具体的な在り方については、学習の輪･ジグソー法や反転学習、学びの共同体、『学び合い』、浅い学びから深い学びへ…等が様々に提案されている。その一方で、すでにコンピテンシー・ベース教育への批評、各教科等の本質や原理の重視とそれを超えた教科横断性・汎用性の関係の再構築に対する危惧等、多様な論点も出され始めている。

アクティブ・ラーニングは学び型の一つの手法であり、目的は「学びの質」、「質的な価値ある深まり」（ディープ・ラーニング）の獲得、答えのない時代に授業で「習得・活用」した学びの方略を自己課題や生活経験・生き方と結び付け、「一般化・汎用化（探究）」できるようなメタ認知能力の育成にあるといえる。そのための主体的・能動的な学習システムの開発・再構築が必要である。

こうした学びのシステムを系統的・横断的（汎用的）に創るための重要な鍵が「アクティブ・ラーニング」、そして「教科間の往還」や重点化をはかる力量としての「カリキュラム・マネジメント」である（注6）。以下、アクティブ・ラーニングを活かした授業を構想するための、さらに「質の高い深い学び」を保証するための条件（課題）を5点に絞り述べることとする。

1、学習形態の工夫―学びの保証・学習形態の段階―

子ども達をアクティブに活動させるためには、まずは学習形態の工夫にレベルがあるとみる必要がある。一つは、子ども達の基礎的な関係意識、話す聞くことの基礎、学び合うためのスキルの基礎・基本を確かに習得させる段階としての工夫である。ここでは、表層的な学習規範・規律で終わらせずに習得段階から質的・系統的な深まり（高まり）へ導くための本質的・系統的な指導観・教育技術をもっていることが必要である。

二つには、学習形態が、ある教育理念やある学習者像・指導方法をもっている場合もある。ジグソー法や反転学習、『学び合い』、浅い学びから深い学びへ…等も巨視的にはこの段階・レベルを含んだ提案とみることができる。自己・他者・情報等との対話や交流が学習形態として保証され、子ども達個々あるいは集団（組織）としての「学びの主体性」を創る段階である。

2、「学びの質、深まり」を重視するアクティブ・（ディープ）ラーニングの段階―個々・学級集団・系統性―

アクティブ・ラーニングは「学びの質、深まり（ディープ・ラーニング）」を重視する観点から選択・構想し、単元構想・指導過程に位置付ける必要がある。「主体的・能動的な活動」という言葉に踊らされず、また安易で表層的な活動だけの学習にしないための条件は三つある。

第一に「習得」と「活用」の確かな定着が意図的に構想されていることが不可欠であること、第二に教科の本質的・原理的な魅力（深い理解、発見・共感等）にあった学び方（学びのモデル）を身に付けさせていること、第三には指導過程（単元構想）のステップに「習得・活用」段階、学びの質・深まりを促すような指導・支援がどう位置付けられているか、言語活動の効果的な選択と位置付けの妥当性・系統性等が鍵となる。

3、「結果としての学び」の自覚とメタ認知化の開発

学習指導要領構造化の基軸として整理された「三つの柱」（「何を知っているか、何ができるか」、「知っていること・できることをどう使うか」、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」）は、子ども達が身に付け、結果として「生きる力」に転化できるような学びの「振り返り（学びの一般化・汎用性）」、「メタ認知化」の観点やレベルを構想する必要がある。学びの横断的汎用性・メタ認知化を重視する観点から到達目標（評価規準・基準）に対応した「振り返り（学習技術としてのメタ認知の観点）」の新たな開発が必要となる。これは同時に、各教科の特質を踏まえ、かつその重層性や往還・汎用性をマネジメントする「カリキュラム・マネジメント」の視点でもある。

4、パフォーマンス課題（・評価）対応と「質の高い深い学び」の保証

何がどうなれば活用力としての「思考力・判断力・表現力等」が高まった、あるいは身に付いたといえるのか。浅い学び・理解から主体的・能動的な「深い人間的な学び（批評的・創造的な学び）」につなげるための指導と支援・評価の観点とは何なのか（注8）。

こうした評価方法の開発を具体化するためには、基礎的・基本的な知識・技能の「習得」段階を超えた…説得力ある論述やプレゼンテーション、多様な文脈に応じた活用型のテキスト形式による「新たな表現力（判断力）」の解明が求められる。例えば、現行学習指導要領「国語科」でも位置付けられている、詩歌や随筆、物語等の創作と評価観、鑑賞・批評文を書き論ずる、評論を批評する等の言語活動である。

本稿では、国語科テキスト形式論の立場から、従来の国語科教材研究論の狭さと課題（例：多様なテキストの分析・評価、学力テストB問題に対応できない教材・授業・指導観…）を超える授業構想について、随筆（エッセイ）の創作と評価を例に実践的にルーブリックの開発・提案を行った（注3・7）。

〈付　　記〉

1　本稿は佐藤・森・有田による共同研究の一環であり、学会発表・佐藤洋一「21世紀型教育と国語科学習」、有田弘樹「『テキスト形式』を生かす21世紀型学習」（共に第129回全国大学国語教育学会〈西東京大会〉2015年10月24～25日、創価大学）を骨子としている。なお、実践事例の詳細は、誌面の関係で論述できなかった。別稿を期したい。

2　森和久は校長職にあり（前・名古屋市教育委員会学校教育部長）、これからの国語科学習と言語力・言語活動の充実、アクティブ・ラーニングと評価方法開発論等の具体化に向け研究を進めている。なお、名古屋では「第48回全国小学校国語教育研究大会・名古屋大会」（兼「第8回名古屋国語教育研究会・全国大会」）が2018年（平成30年）11月1～2日に開催予定であり、現在準備が進められている。

3　本稿の提案をテーマにした公開研究会「21世紀を生きる子どもたちにつける資質・能力と評価－物語の『学び合い』でどんな学力を高めるか？―」（2016年1月11日、名古屋国際センター）が開催される（主催「21世紀型教育研究会」名古屋及び愛知県教育委員会後援。会長：佐藤洋一、副会長：

兵藤伸彦・鈴木悟志、理事：森和久・岡田豊・雨田陽三・萩原孝・蜂須賀渉他、事務局長：吉川和良、副事務局長：室賀美紀・加藤洋佑・有田弘樹）。

〈注　　記〉

1　文部科学省「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会―論点整理―」（2014年3月）。同・初等中等教育分科会（教育課程企画特別部会）「論点整理」「補足資料」（2015年8月20日。その他、8月26日、10月答申素案等）。

2　国立教育政策研究所・報告書5「社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原理」（2013年）、同・報告書7「資質や能力の包括的育成に向けた教育課程の基準の原理」（2014年）。田中義隆『21世紀型スキルと諸外国の教育実践―求められる新しい能力育成―』（明石書店2015年）、松尾知明『21世紀型スキルとは何か―コンピテンシーに基づく教育改革の国際比較―』（同2015年）、三宅ほなみ監訳（P・グリフィン他編）『21世紀型スキル』（北大路書房2014年）、米国学術研究推進会議編『授業を変える』（北大路書房2007年）等。

3　佐藤洋一編著『国語科「習得型・活用型学力」の開発と授業モデル（全4巻）』（明治図書2011年）、同編著『実践・国語科から展開するメディア・リテラシー―教育』（同2002年）、同「全教科・活動の中核としての『国語科習得・活用型学力』の開発と授業―21世紀型スキル（学びと評価のリテラシー）の再構築―」（『国文学言語と文芸第129号』国文学言語と文芸の会2013年）、佐藤洋一・有田弘樹（共著）「伝統文化（古典）における『習得・活用』の授業開発―『竹取物語』のテキスト形式をめぐって―」（『愛知教育大学研究報告第61輯』2012年）、佐藤洋一・室賀美紀（共著）「昔話の魅力を生かす『伝統的な言語文化』の授業開発」（『愛知教育大学教育創造開発機構紀要第5号』2015年）等、参照。

4　佐藤洋一「批評的・創造的な学びの授業開発―テキスト形式に着目した21世紀型学習―」（第127回全国大学国語教育学会〈筑波大会〉発表2014年11月）、同「21世紀型授業開発と国語科『活用型テキスト形式』」（第128回同学会〈兵庫大会〉発表2015年5月）、有田弘樹「随筆教材の『テキスト形式』に着目した教材研究への視点―『21世紀型学力』の育成に向けた国語科授業開発―」（第125回同学会〈広島大会〉発表2013年10月）等。

5　田中耕治監訳（ダイアン・ハート著）『パフォーマンス評価入門』（ミネルヴァ書房2012年）、西岡加名恵・田中耕治編著『「活用力」を育てる授業と評価（中学校）―パフォーマンス課題とルーブリックの提案―』（学事出版2009年）、西岡加名恵・石井英真・田中耕治編『新しい教育評価入門』（有斐閣コンパクト2015年）等。

6　佐藤洋一「国語教育展望　国語科におけるアクティブ・ラーニングの課題」『月刊国語教育研究（No.、526）2016年2月号』日本国語教育学会編集・刊行（2016年2月）。

7　新しい学びを教科の本質（教科教育論）から論じた提言・論考もあるが、私見では本稿で論じた課題を克服しているとはいえないと思われる。奈須正裕・江間史明編著『教科の本質から迫るコンピテンシー・ベースの授業づくり』（図書文化2015年）、東京大学教育学部・カリキュラム・イノベーション研究会編『カリキュラム・イノベーション―新しい学びの創造に向けて―』（東京大学出版会2015年）等。

8　新しい資質・能力の育成にあたっては、いわゆる「非認知的能力」「リジリエンス」等の視点も考慮し、さらに検討が必要である。中室牧子『学力の経済学』（ディスカバー・トゥエンティワン2015年）、ポール・タフ著・高山真由美訳『成功する子 失敗する子』（英知出版2013年）、ウォルター・ミシュレ著・柴田裕之訳『マシュマロ・テスト 成功する子・しない子』（早川書房2015年）、『幼児教育の経済学』（東洋経済新聞社2015年）、中原淳監修（脇本健弘・町支大祐著）『教師の学びを科学する―データから見える若手の育成と熟達モデル―』（北大路書房2015年）等。

〈主な参考文献〉

1　国立教育政策研究所教育課程センター「平成27年度全国学力・学習状況調査 解説資料（小・中学校国語）」（同年）、石井英真『今求められる学力と学びとは』（日本標準ブックレット2015年）、奈須正裕・諸富祥彦『答えのない時代を生き抜く子どもの育成』（図書文化2011年）、安彦忠彦『「コンピテンシー・ベース」を超える授業づくり』（図書文化2014年）、松下佳代『〈新しい能力〉は教育を変えるか』（ミネルヴァ書房2010年）等。

2　松下佳代『ディープ・アクティブラーニング』（勁草書房2015年）、小林昭文『アクティブ・ラーニング入門』（産業能率大学出版部2015年）、梶田叡一編『アクティブ・ラーニングとは何か』（金子書房2015年）、河合塾編（小林昭文・成田秀雄著）『今日から始めるアクティブラーニング』（学事出版2015年）等。

3　佐藤洋一「鑑賞・批評・評価する学力と国語科教材開発」（第26回日本教材学会研究発表2014年10月）、同「学ぶ楽しさ、教える楽しさ」（『教育と医学2014年5月号』慶應義塾大学出版社）、室賀美紀「昔話を読む楽しさを生かす『伝統的な言語文化』の授業開発―教科書教材『ばけくらべ』『茂吉のねこ』の読み方から―」（第77回国語教育全国大会発表資料2014年8月）、加藤洋佑「『思考力・判断力・表現力等』を育てる鑑賞文指導―『「鳥獣戯画」を読む』『この絵、わたしはこう見る』（小6・光村図書）を例に―」（第76回同大会発表資料2013年8月）等。

4　佐藤洋一・有田弘樹（共著）「随筆のテキスト形式を生かす『習得・活用』『批評』―『自立・協働・創造』につながる授業の開発―」（『愛知教育大学研究報告第63輯』2014年）、同「『生き方・価値観』を創造する21世紀学習―随筆教材『字のない葉書』（中学二年）を例に―」（『同第64輯』2015年）、同「生き方・判断力を鍛える『伝統的な言語文化』授業開発―『平家物語』（中学二年）の『習得・活用』を例に―」（『同第62集』2013年）等。

5　森和久「提言『未来に生きることばの力』の今と未来」『土曜国語第33号』（名古屋国語教育研究会発行2014年）、同監修『指導者のための若手教員の育成を図る研修の手引き』（愛知県教育委員会編集・刊行2015年）、同『名古屋教育歴史Ⅲ名古屋の発展と新しい教育』（名古屋市教育委員会発行同年）等。

6　有田弘樹「自分の『生き方・考え方』を見つめ直し、実生活につなげようとする生徒の育成―随筆教材の『テキスト形式』を生かした授業づくりと評価を通して―」（愛知国語教育研究会登壇発表2014年8月）、同「作品の『テキスト形式』解明による国語科授業開発―『批評的・創造的な言語力』を育てる授業モデル提案―」（「国文学言語と文芸の会2013年度大会」発表資料2013年12月）、同「生き方・判断力を鍛える『伝統的な言語文化』授業開発」（第123回全国大学国語教育学会〈富山大会〉発表、2012年10月）等。

（2015年12月25日受理）